

第5回「女性研究者のリーダーシップ」研究会のお誘い

この研究会は、愛知大学研究助成金による研究プロジェクト「女性研究者のリーダーシップ研究」の活動の一環として行われるものです。公開研究会ですので、研究会への参加は大いに歓迎いたしますので、興味のある方はどうぞ遠慮なくお越し下さい。

テーマ：

科学者と戦争

と き：2007年2月28日（水） 午後2：00～午後5：00

ところ：愛知大学 車道校舎 会議室（当日までに確保）

講演

① 加藤利三（京都大学名誉教授）
タイトル 「戦争と科学-科学者の業について」

② 河辺一郎（愛知大学現代中国学部教授）
タイトル
「現代の戦争と平和－20世紀を省みる」



現代科学のもっとも深刻な問題は、原爆に象徴される科学と戦争の関係です。マンハッタン計画から始まった大規模な科学の戦争との関係です。原子エネルギーに関してはマリー・キュリーをはじめとして、原爆開発の母といわれリーゼマイトナーなど有名な女性科学者が研究の推進に大きな貢献をしています。しかし、それが最初にこの世で利用されたのが、原爆であったことは事実です。そこに関わった科学者は、いったいどう考え、困難な時代の中で、科学と社会の関係を見つめてきたのか、そして戦後どうこの問題が展開したのか、を考えようというものです。さらに現代の戦争の構造自体の科学的な分析も必要となります。そうした作業の上にとって、科学の未来のあり方を考えていきたいと考えています。そこで今回は、女性研究者の視点から、科学と戦争を考えるための素材として、「科学者と戦争」というテーマを取り上げました。

加藤利三氏は、京都大学理学部教授を定年退官され、その後、いくつかの大学で非常勤講師をしながら、京都サイエンスクラブ代表として、実験器具を自ら創作しながら子供たちに理科実験の指導にあたり、京都大学内にある保育園の理事長として今も多くの保育所の運営に関わったりとお忙しい方です。また、京都科学者懇談会で、湯川をめぐるさまざまな活動を改めて評価するための研究会で、「科学者の業（ごう）」について興味深いお話をされました。そこで、今回はこの点に焦点を当てて、湯川を初めとした科学者の考えたことを追求してみたいと思います。河辺一郎氏は、平和学のアクティブな研究者で、国際的視野から、戦争の問題を真正面から取り上げてこられた方です。また、愛知大学では、2006年授業のなかに、総合科目「戦争と平和」を企画され、意欲的な授業を展開されました。この総合科目には、功刀先生や坂東も一端を受け持たせていただきましたが、大変まじめで熱心な学生が集まり、とてもいい雰囲気でした。また、私が企画しました2005年度、世界物理にちなんで坂東が企画した「アインシュタインから湯川へ」でも、核兵器廃絶へむけての国際的な動きをご紹介いただきました。

20世紀は、近代国家という、強大な組織が主導した2つの大戦を経て、戦争の形態もそれまでとは一変しました。そうしたなかで、キュリー夫妻による原子エネルギーの発見が、原爆という形で実用化されたことは、科学と社会を考える上で、深刻な問題を提起したといえるでしょう。人類は、それを引きずったまま、21世紀に突入しました。この問題を通して、マリー・キュリーやリーゼマイトナーがどのように考えたかなど、第1回目の研究会で川島先生にお話をうかがいました。今回はそれに続く第2弾です。これは愛知大学で行います。